

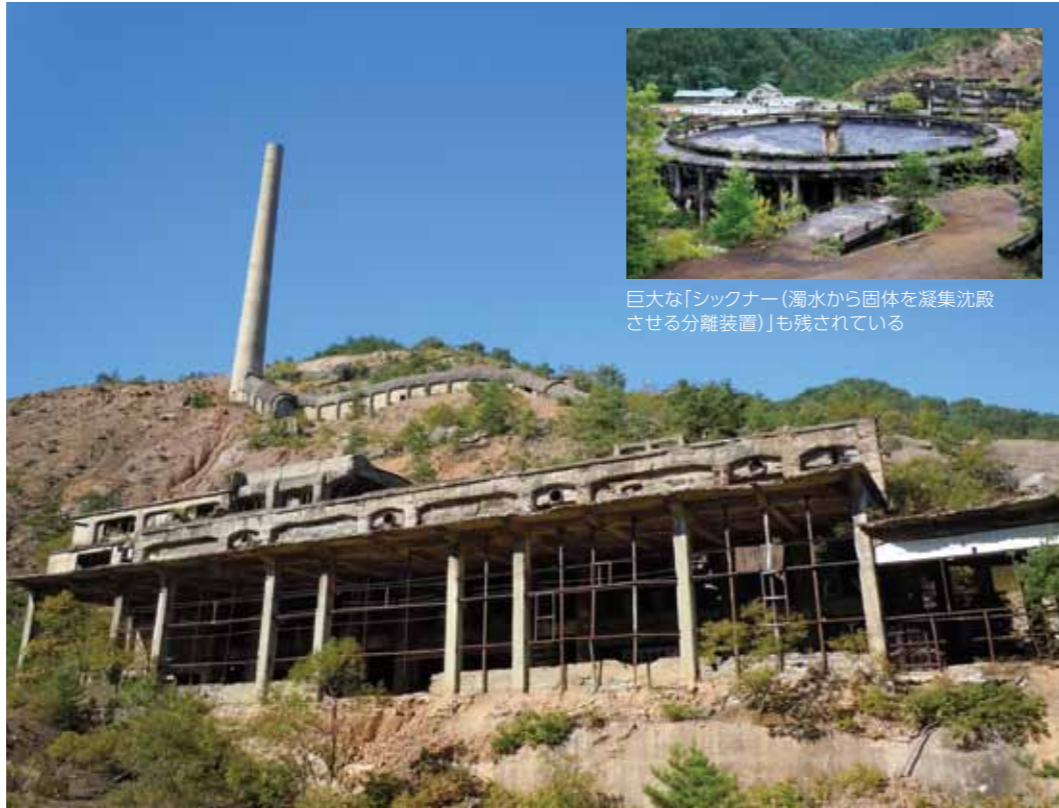
史跡尾去沢鉱山



「石切澤通洞坑入口」から、観光坑道へ。ここは唯一見学で入ることができる坑道



「グラウンドマイン」と呼ばれるシュリンケージ採掘法による採掘跡。鉱石を下から上へと採掘し続けることで巨大な谷ができ上がった



巨大な「シツクナー（濁水から固体を凝集沈殿させる分離装置）」も残されている

コンクリートの城塞のような製錬所跡。その奥の山腹にそびえ立つ巨大な煙突に向かって、大蛇のように煙道が伸びる



昭和39年、活気に満ちていた尾去沢鉱山の全景



いまや製錬所のコンクリート柱は朽ちて草生している

【尾去沢鉱山の概要】

- 発見：和銅元年（708年）
- 閉山：昭和53年（1978年）
- 推定総産出量：銅30万t、金4.4t、銀155t
- 遺産認定：土木学会選奨土木遺産、近代化産業遺産

日本近代化の源流を訪ね 国内最大規模の坑道に潜る

史跡尾去沢鉱山 秋田県鹿角市



色づいたリンゴに小さな秋を発見



穏やかな佇まいの鹿角市街



「道の駅がづの」には鉱山とともに鹿角市の文化を代表する「花輪ばやし」の舞台も

近年「世界遺産、日本遺産、近代化産業遺産」など、日本の歴史と文化を後世に伝えるための「遺産」に熱い視線が注がれている。だが幕末・明治にはじまるわが国の近代化を支えた工場や鉱山などは、その価値を理解されないまま遺棄・放置されているものが少なくない。大切なのは、どうやって残し活かすかだ。今号は、近代化産業遺産の一つ秋田県鹿角市（かづのし）の「史跡尾去沢（おさりざわ）鉱山」にスポットを当て、日本の銅産業に大きな足跡を残した同鉱山の「いま」を見つめる。

巨大煙突・ガリバーの足元に 煙道の大蛇が絡み付く

9月初旬、厳しい残暑が続く東京を出発し、秋田県北東部に位置する鹿角市尾去沢にある「史跡尾去沢鉱山」へ向かう。我々は青森空港から東北自動車道を南下するルートを選択した。生憎の雨で十和田湖、岩木山などの土地を代表する景色は霧の中に。それでも沿道から見える赤く色づいたリンゴに「秋の東北」の気配が漂っている。鹿角八幡平ICを降りて花輪の街中へ。ここまで約90分。さらに山道に入って10分ほど車を走らせると、突然視界が開け、大煙突が姿を現す。意外と町から近いことに驚く。

坑道の全長は約800km 日本最大・最古の銅脈群採掘跡

煙突の高さは約60m。煙害を避けるため地上高く山の中腹に建てられている。製錬所から離れた位置となるため、煙道が煙突まで長々と伸び、その姿は、ガリバーの足元に大蛇が食らいついているかのようだ。

尾去沢鉱山が発見されたのは、1300年以上も前と言われる。本格的な開発は、慶長3年（1598年）、南部藩により行われた。当時は金山として注目され「西道金山」と呼ばれていたが、17世紀後半に銅山として採掘がはじまる。南部藩時代は、手掘りの坑道で幅60cm、高さ90cmほどしかなく、槌と

街と銅の歴史を伝えるスポットへ 鉱山の中で時が巻き戻っていく

製錬所跡に立つてみる。朽ちたコンクリートは草生し、「夏草や兵どもが夢の跡」の句が思い浮かぶ。だが、悲観することはない。ここは、鹿角市の重要な観光スポットとして「いま」を生きている。

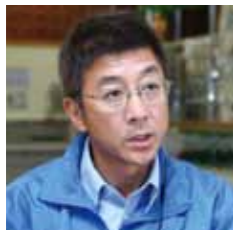
「閉山と同時に鉱山で働いていた多くの人が街を出ていきました。そこで、この鉱山を観光地にして街を活性化させたいと鹿角市と協力し、閉山4年後に「マイナランド尾去沢」をオープンしたのです」と話すのは、株式会社ゴールデン佐渡 支配人の成田昌幸氏。ここは岩盤が固く、観光客が坑道に入り、当時の採掘跡をそのまま見ることができるといふ貴重な史跡だ。しかもその全長は約1.7kmにもなる。

「オープンとともにお客様は次々と増え、鉱山中の見学コースだけでは対応できないほどでした。そこで、別の坑道にアトラクション的な施設も建設したのです。しかし、パブルの崩壊とともに観光客が減少し、遊園地よりも本物志向だ」と方向を転換。国内近代化産業遺産として認定されたことを

機に、名称も「史跡尾去沢鉱山」と変更しました。いまは鉱山としてのありのままの姿をご覧いただき、さらにかつて鉱山で働いた人々の姿を人形で再現するなど、文化的・歴史的な意義も伝えていきます。いまでは年間約5万人の観光客がここに集まるほどになりました。その中には、以前鉱山で働いていたお年寄りが、帰省の折りに孫たちを連れて訪れ、昔語りをする姿も見られます」

地元中学校の生徒たちは、授業の一環としてこの史跡でのボランティアガイドを行っている。学年が進むことに異なる分野のガイド内容を学び、3年間で尾去沢鉱山と街の文化・歴史を一通り修得するという。我々も歴史を学ぶべしと坑道の中へ。グラウンドマイン（シュリンケージ）と呼ばれる天井高く、地下深く伸びた採掘跡、江戸時代から昭和までの採掘の様子を再現した人形など、見所は多い。坑道内の温度は1年を通して約13℃。お酒や野菜などの貯蔵にも活かそうとテ

ストも進めている。すべてを見終えるまで40分近くかかり、すっかり震え上がってしまった。訪れる際は、季節を問わず、ぜひ上着を1枚用意されることをお勧めする。



株式会社 ゴールデン佐渡 支配人 成田 昌幸氏



江戸時代の採掘「からめ場」などを人形で再現。その姿を見ていると自然にタイムスリップしていく